26PB-pm299

獣医療および薬物治療に関する犬の飼い主の意識調査

○島田 祐輔[1], 町田 いづみ[1] ([1]明治薬大)

[目的] 日本のペット飼育率は約3割、最も多い種は犬で猫が続く。既に、ペットは家族の一員として位置し健康への関心も高い。本研究では、犬の飼い主の獣医療に関する意識調査から、獣医療の中で薬剤師が果たし得る機能を考察する。

[対象と方法] 現在獣医療を受けている犬の主たる飼い主を対象に、インターネットによるアンケート調査を行った。調査期間は2016年5月20日から5月21日で、この調査期間内に412名の回答を得た。

[調査の内容と解析方法]調査内容は①治療薬の知識②治療に関する不安③獣医療における治療モデル④治療への介入⑤情報提供、③-⑤では、希望と現状について解答を求めた。解析は、①-③は1要因のχ二乗検定、④⑤は希望と現状の2群間でWilcoxonの符号付き順位検定を行った。

[結果・考察] 獣医療モデルは、飼い主の希望・現状ともに獣医師の意見に同意する、いわゆる「獣医師中心医療」傾向にあった。しかし、治療への介入では全ての項目で、現状より希望レベルの方が高く、治療へのより積極的関与を望んでいた。さらに、情報提供の全ての項目においても現状と希望との間に有意差があり、飼い主は希望レベルの情報提供を受けていないと認識していた。これらの結果から、「獣医師中心の医療」傾向は、インフォームドコンセントのあり方が反映されているのではないかと考える。薬の知識では、副作用で「全て知っている」との回答が3割以下であった。一方、治療上の不安においては6割近くが薬の副作用をあげており、知識量と不安との関係が示唆された。今後、獣医療がヒト医療同様に飼い主中心の医療に向うならば、薬や薬物治療に対するインフォームドコンセントは必要不可欠となる。そこでの薬剤師の果たし得る機能は大きいと考える。